

孤高の女流画家 野村千春と日野

〈生い立ち～中野区上高田時代〉

野村千春（旧姓武居）は、明治41年（1908）長野県諏訪郡平野村（岡谷市）に、豪農の二女として生まれました。大正14年（1925）平野高等女学校（岡谷東高校）卒業後、父の反対を押し切って上京、キリスト教伝道者の姉の下に身を寄せました。高等女学校在学中よりその才能を認められ、画業を志していた千春は、昭和4年（1929）21歳の時に画家中川一政の内弟子となり、春陽会研究所に学びました。昭和6年（1931）に「花」が春陽会に初めて入選し、以後毎年出品を続けました。また、同郷の彫刻家武井直也から彫刻を学び、妹と共に武井家に留守番として住まわせてもらいました。

昭和7年、童謡「たきび」で知られる詩人巽聖歌と結婚し、中野区上高田に新居を構えました。二人のなれそめは、千春が彫刻のモデルに、彫の深い顔立ちの人をと頼んだことがきっかけだったそうです。昭和9年（1934）に長男^{いりひこ}塚彦が、16年に長女やよひが生まれました。「絵を描かせてほしい」ということが、唯一の結婚の条件だったということですが、「夫は絵を描くのにじゃまにならない人でした」と語っている通り、巽聖歌は千春が絵を描くことには理解がありました。

上高田時代には、巽聖歌の文学仲間だった童話作家新美南吉が近くに居住し、病弱な南吉の看病を親身になって行うなど、深い交流がありました。南吉の当時の日記や手紙には、千春のデッサンのモデルを務めたときの様子や、日々の交流が様々に綴られています。南吉が、千春の画業を応援し、敬愛と感謝の念を抱いていたことが伝わってきます。



野村千春が作った巽聖歌像（昭和6年頃）

戦争中は、夫巽聖歌の出身地岩手県紫波郡日詰（紫波町）に近い岩手郡沼宮内町（岩手町）に疎開し、中学校の教師などをしていました。昭和21年（1946）に、女流画家協会が創立されると、創立会員として参加しました。

〈日野に転居して〉

昭和23年（1948）に家族と共に上京して、東京都南多摩郡日野町東大助（日野市旭が丘）に居を定めました。当時の旭が丘は、近くに八王子競馬場があり、人家もまばらで、田園風景が広がっていました。戦後の混乱期でもあり、文学者の夫との不安定な生活を支え、子育てをしながら画業にはげむ生活には、困難も沢山ありました。千春は、得意の野草料理で夫の来客をもてなすなど、様々な創意工夫のなかで絵を描き続け、独自の画風を確立していきます。

昭和27年（1952）地元の日野の風景を描いた「冬のたんぼ」が女流画家協会賞を受賞、同年春陽会会員に推挙され、翌年「丘の上の日野デーゼル」が再度女流画家協会賞を受賞しました。当時の画壇はまだ男性が中



日野市旭が丘に転居した頃、巽聖歌と

心で、春陽会においても女性が正会員になることは難しく、千春の会員推挙は、画家三雲祥之介夫人であった小川マリに続く二人目の快挙でした。「冬の富士電機遠望」・「畑の中の六桜社」・「日野早春」(昭和 28 年)、「冬の八高線」(昭和 30 年) など、日野の風景を描いた作品が多数残されています。

昭和 20 年代に、多摩平に居住していた作家伊藤整の一家と、家族ぐるみの交流がありました。夫人や娘さんにモデルになってもらったり、伊藤家のミシンを借りて子どもの洋服を作るなど、画業を続ける生活を支援してもらったこともありました。

昭和 45 年、権威ある東京銀座資生堂ギャラリーにて個展を開催、以後各地で個展を行なっています。また、ニューヨークリバーサイド美術館など、海外の展覧会にも作品を出品しました。昭和 48 年夫巽聖歌没後も旭が丘に居住し、平成 12 年(2000) 2 月 12 日 91 歳で亡くなるまで、絵を描き続けました。亡くなった日は、奇しくも聖歌の誕生日でした。

〈画家としての野村千春〉

野村千春の絵について、師の中川一政は「女流画家ではあるが、女流の繊細とか優美とかに全く背を向けている」と評しています。力強い大地(土)の描写と、生命力を感じさせる花の絵に定評があり、多くの人々を魅了してきました。暗い画風のなかに光る色彩の美しさは、晩年になるほど輝きを増しています。長女の中川やよひさんは、「こんな迫力のある絵を女が書けるはずがないという、展覧会観覧者の感想を、とても喜んだ」というエピソードを語ってくれました。日本の女流画家の草分けとして活躍した一生でした。

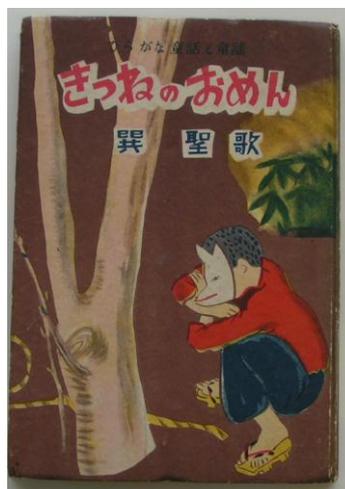


晩年の野村千春(平成 2 年)

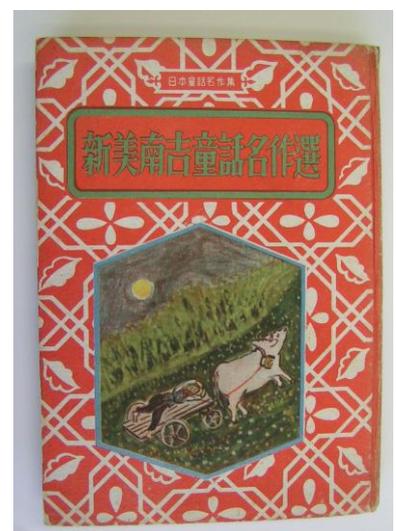
聖歌が主催した短歌雑誌『新樹』の挿絵をはじめとして、『きつねのおめん』(昭和 25 年)、『楽しい詩・考える詩』(昭和 46 年) など、聖歌の作品の挿絵を描いているほか、『新美南吉名作選』(昭和 25 年) の装丁・挿絵も手がけました。作品の多くは、諏訪市立美術館と岡谷美術考古館に収蔵されており、没後も数回回顧展が開催されています。(日野市郷土資料館 北村澄江)



野村千春新作油絵展の案内(昭和 47 年) 亡くなる前年の聖歌が、挨拶文を寄せている。



野村千春が挿絵を描いた巽聖歌『きつねのおめん』(昭和 25 年) 坊彦とやよひがモデルになった



野村千春が装丁・挿絵を手がけた『新美南吉童話名作選』(昭和 25 年)